言語学と歴史学の共通点
― ことばを研究する私が歴史を学ぶ学生に伝えられること ―

藤　森　千　博

【要　　旨】
本稿は、2015年度後期に本学で開講された2015別府大学公開講座（国際文化論１）『研究のことば、教育のことば ―教育、研究、人生を語る（その三）―』において私が発表した「「英語学」という誤解 ―ことばの本能を探る―」（2015年10月６日（火））の内容に加筆・修正を加えたものである。本稿では、大学での研究活動には研究分野を超えた共通点があること、またその共通点は学生時代のみならず社会に出てからも有効に機能することを論じる。

【キーワード】
生成文法理論、研究の思考プロセス、「目に見えないもの」がある、「常識」を打ち破る

１．はじめに

2015年春、私は別府大学に赴任した。それまでの人生の半分以上を青森で過ごしてきた私にとって九州への「上陸」は数年前に学会発表で福岡に出かけた一度きりで、二度目の九州上陸がまさか自分がそこで仕事や生活をするためになろうとは夢にも思っていなかった。さらに、私が配属されるのが史学・文化財学科だと知り正直大いに戸惑った。言語研究に携わってきた私が歴史研究の学科に配属されることに何とも言えない不安を感じたのだ。これまでの私の研究や携わってきた仕事の経験からは、史学・文化財学科で学ぶ学生たちに伝えられることがないのではないだろうか。また学生たちからすれば、歴史研究を専門としない教員が担任になってしまうことはいわば「はずれくじ」を掴まされたような気持ちになるのではないか。そんな不安を抱えたまま新学期はスタートし、歴史研究には一切触れず（触れられず）に、つまり学生の興味関心には一切寄り添わずに（寄り添えずに）、史学・文化財学科の学生と関わっていくことに何とも言えない不甲斐なさを感じた。

そんな中、私の恩師が常々「言語研究の思考プロセスをきちんと理解し身につけていれば、社会に出てからも同じやり方で物事を進められる（だからしっかり勉強しなさい）。」と仰っていたのを思い出した。当時はその意味がよく分からなかったが、まさに今こそこの言葉が私にとって重要な意味を持つのではないか、と感じている。恩師が言うように言語研究の思考プロセスが社

会に出てからも通用するものであるならば、歴史研究を含めあらゆる学問における思考プロセスには何かしらの共通点があるのではないか。その共通点を明らかにすることができれば、それが研究活動のみならず社会に出てからの活動でも活かせるという点でことばを研究する私が歴史を学ぶ学生たちに伝えられることがあるのではないか。そんな思いから本稿をまとめ、私が史学・文化財学科で学ぶ学生たち（さらに言えば言語学とは畑違いの分野で学ぶすべての学生たち）に関わるためのいわば覚書としたい。

本稿の構成は以下の通りである。まず次章では私の研究分野について概観する。さらに３章で私の研究分野と歴史学をはじめとする他の学問との共通点を探ったのち、４章では３章で得られた学問研究における共通点が社会でどのように役立てられるかについて論じる。最終章では本学の建学の精神「真理はわれらを自由にする」を本稿の主張に沿って再解釈しつつ本稿をまとめる。

２．私の研究分野

２．１．統語論と生成文法理論

先述の通り、私の研究分野は「言語学」であるが、ことばのどの側面に焦点を当てるかによってその研究領域は細分化される。私の研究領域は「統語論」と呼ばれるもので、簡単に言えば、単語を並べて句や文を組み立てる際どのような規則にしたがって単語を並べているのかを明らかにしようとしている学問である。さらに、統語論の中心となっている研究理論は「生成文法理論」と呼ばれるもので、言語学者ノーム・チョムスキーが1950年代に提唱し、その後60年以上の時を経て今もなお進化し続けている言語理論である。

生成文法理論が一貫して問い続けている問題は「なぜ、またどうやって、ヒトの子どもは母語を獲得できるのか」である。我々は日常生活において何の不自由もなく母語を用いた言語活動を行っているが、ヒトがことばを使うのはあまりにも「当たり前」すぎて「なぜヒトはことばを使えるのか」という根本的な問題を問うことすらない。事実、生成文法理論以前の言語学は実際に発話された文のみを対象としたいわば記述的な研究が主流をなしており、生成文法理論が掲げた問題意識はこれまでにない全く新しい視点でことばのあり様を捉えようとする試みであり、その成果は「認知革命」とも呼ばれるヒトの心を探る学際的な研究の先導的な役割を担うほどであった。

「母語を獲得する」という事実を研究するには、ことばを使えない状態からことばを使える状態へと進んでいくプロセスを詳細に観察し、その様子から得られた知見を基に理論を組み立てていく必要がある。したがって我々がまず観察しなければならないのは、今まさに母語獲得の真っただ中にある子どもの様子である。

実際に子どもが母語を獲得する過程を観察してみると大きく２つの点に気づく。まず、子どもは周囲で大人たちが発することば（第一次言語資料：Primary Linguistic Data, PLD）を言語入力としてそれを頼りに母語（言語出力）を獲得していることは明らかであるが[1]、言い間違ったり言いよどんだりと、大人が発する PLD のすべてが常に正しいものばかりではない（これを「刺激の貧困」と呼ぶ）。つまり、子どもはことばに関して「不完全な入力」を与えられていることになる。もし不完全なデータを入力されたのであればそれを基に算出される出力（＝母語）も不

1　この点に関して非常に有名な例はオオカミに育てられたとされるカマラとキマラの逸話である。その逸話の信憑性については議論があるものの、幼少期にヒトと接する機会を失った彼女たちは発見当時人間言語を発することはなかったとされており、この逸話が事実だとすれば、彼女たちがことばを発せられなかったのは幼少期に十分な PLD に触れてこなかったことに起因すると考えることができる。

完全なものになると予測されるが、実際には子どもは特定の文法規則を持った豊かで複雑な言語知識、つまり「完全な言語出力」としての母語を身につけることができる。この事実を説明するためには、ヒトの脳内には与えられる言語入力が不完全であってもそれを基に完全な言語出力を算出できるような仕組みが備わっていると仮定する必要がある。

また、同じ地域に住む子どもたちは同じ言語を母語として獲得するが、その獲得の過程、特に子どもの言語環境はひとりひとり異なっているはずである。例えば、私が経験してきた言語経験と全く同じ経験をした人は世界中どこを探してもいないはずである。つまり、子どもがさらされるPLDは質・量・与えられる時期の全てにおいてまちまちであり、子どもひとりひとりの言語出力は異なるものになるはずである。それにもかかわらず母語の獲得は驚くほどスピーディで、しかもその結果として身につく言語知識はほぼ均質的である。この事実を説明するためには、ヒトの脳内にはある一定の質と量を備えた言語入力（PLD）が与えられればそれを基に常に均一的で正しい言語出力を算出できるような仕組みが備わっていると仮定する必要がある。

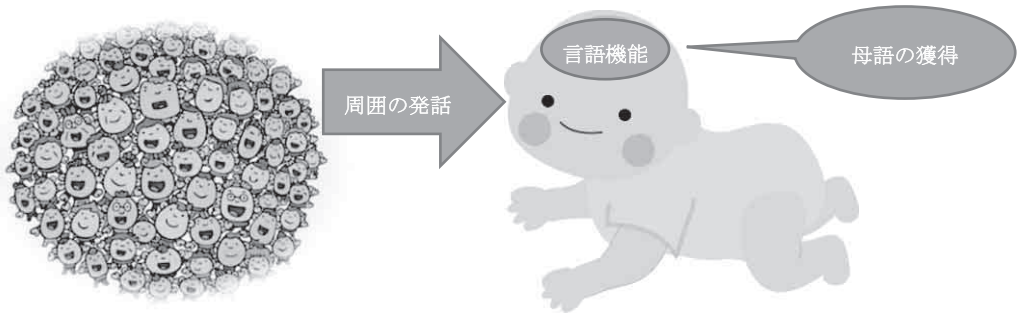
このような事実は生成文法理論において「プラトンの問題」と呼ばれており、常に生成文法理論に基づく言語研究の中心課題となっている。

（1）プラトンの問題

ヒトが生後経験することばは貧困で偏りがあるにもかかわらず、ヒトが一様に短期間にことばを獲得できるのはなぜか。

この「プラトンの問題」を解明すべく、生成文法理論では次のような作業仮説を立てている。それは、「ヒトの脳に「言語の使用と理解に関する一連の能力（＝言語機能）」が生得的に備わっている」というものである。この仮説が正しければ、子どもは生まれつきことばがどういうものであるかを「知っている」ことになり、だからこそ些細な言い間違いを不要なデータとして捨象し必要なデータのみを分析することで完全な母語を獲得できると考えることができるし、子どもの言語環境がひとりひとり異なっていても生得的に備わった言語能力がいわば「ことばの設計図」として作用し、ある一定の量と質を持ったPLDにさらされることで幼少期のうちにしかも均質的に（＝設計図通りに）母語を獲得できることを説明できる。以上をまとめると以下のような図になる。

（2）子どもの言語獲得の様子



（2）に示したような過程を経て子どもは母語を獲得していくが、生成文法理論が解明したいのは、母語（言い換えると実際に獲得された個別言語）の特性もさることながら、子どもに生得

的に備わっている言語機能の初期状態の姿である。生成文法理論が仮定する言語機能は、あらかじめどの言語に具現するかが定まっているのはなく、世界中のどの言語にも対応したものであると考えられている。稚拙な例ではあるが、私は長野県出身、妻は青森県出身で九州とは全く縁がないが、小学校一年生になる息子は大分の方言を話すようになった。もし彼が信州弁か津軽弁しか話せないとすればあらかじめ獲得できる言語が親の影響を色濃く受けるという形で定まっているとも考えられるが、親が一切口にしない大分方言を口にし出したという事実を説明するためには、彼の周囲にいる級友や先生方が大分方言を話していて（PLD)、それをもとに彼が大分弁を話し始めた、つまり彼の言語機能が[＋大分弁]という値に定まった（あるいは変更した)、と考えると筋が通る[2]。このように、生成文法理論では言語機能の初期状態（これを「普遍文法：Universal　Grammar（UG)」と呼ぶ）のあり様を明らかにすることが究極の目標となっている。以上を踏まえ、先に挙げた作業仮説を「プラトンの問題」に答える形で言い換えると次のようになる。

（3）「プラトンの問題」への答え
　　ことばの基本設計図（＝普遍文法：UG）がヒトの脳内に生物学的な意味での器官として生得的に備わっている。

このように、生成文法理論は（3）に挙げた仮説に基づき UG の解明をその目標としている。

2．2．生成文法理論における言語研究の実際

上述のように生成文法理論ではヒトの脳内に UG が備わっていると仮定するものの、私たちは UG を直接観察することはできない。なぜならことばを話す人（＝大人）の脳内にある UG はすでにその人の母語用に調整されているため、言語機能の初期段階としての姿ではなくなっているからである。したがって私たちは UG そのものを観察するのではなく、UG を基に作り上げられた個別言語の諸現象を詳しく分析することで UG のあるべき姿を仮定していくことになる。以下では二つの移動現象を例に挙げながらその分析方法を概観する[3]。

まず、英語の受動文を分析する。これまでの英語学習でお分かりの通り、「受け身」とは①目的語を主語に移動させ、②動詞を[be 動詞＋過去分詞]に置き換える、というものである。

（4）a．John_{S} criticized_{V} Mary_{O}.
　　b．Mary_{S} $\underline{\text{was criticized}}_{V}$ by John.

それではなぜ能動文の目的語だった *Mary* が受動文では主語に移動するのだろうか。生成文法理論での説明は次の通りである。能動文において他動詞 *criticized* が持っていた外項（external argument, 主語と捉えてよい）と対格（Accusative Case, 目的格と捉えてよい）が動詞に付加された受動接辞 *−en* によって吸収される。対格を与えられない目的語は「名詞は格を持たなけれ

2　一般的には UG の設定は１回限りと見なされており、上記の息子の例は適切ではないかもしれないが（事実息子の UG は幼少期に大雑把に言えば[＋日本語]と設定されており、方言の違いは UG の再設定に関わるような大きな問題ではない可能性がある)、ここでは UG の設定が遺伝的な情報によってあらかじめ限定されているわけではないという本旨を補足する例として掲載することとする。

3　以下に挙げる言語分析は主に1980年代に生成文法理論の主流となった原理・パラメタ―理論に基づいたものである。最新理論であるミニマリストプログラムやラベル付けアルゴリズムでは下記の分析とは異なる分析をすることとなるが、分かりやすさの点から前者の分析をここでは採用し掲載することとする。

ばならない」とする格フィルター（Case Filter）に違反してしまう。それを回避するために目的語は主語位置へ移動し、主語位置で主格（Nominative Case）を付与される。以上を踏まえ、英語の受動文には次のような規則が働いているものと想定される。

（5）英語の受動文に関する規則
英語では、他動詞に受動接辞－*en* が付加された場合、動詞から格を付与されない目的語は主語位置へ移動しそこで格を付与されなければならない。

次に、英語の *wh* 移動について分析する。これもこれまでの英語学習でお分かりの通り、英語の *wh* 句は文頭に移動する。

（6）a．*John bought what?
b．What did John buy?

ではなぜ英語の *wh* 句は文頭に移動するのだろうか。生成文法理論での説明は次の通りである。*wh* 句は[Q]という素性を持っており、この素性は認可（license）される必要がある。文頭にある補文標識主要部C（Complementizer）が[+Q]を持っており、*wh* 句とCがある関係を持つ場合に *wh* 句の[Q]が認可されると考えるが、英語では *wh* 句がCの指定部（Specifier）に移動し、*wh* 句とC主要部が「指定部－主要部の関係」になることで *wh* 句の[Q]が認可されると考える。この条件を満たすため、*wh* 句は文頭にあるC指定部に移動するのである。以上を踏まえ、英語の *wh* 移動には次のような規則が働いているものと想定される。

（7）英語の *wh* 移動に関する規則
英語では、*wh* 句は[+Q]を持ったC指定部に移動し、*wh* 句と $C_{[+Q]}$ が指定部－主要部の関係を取ることで[Q]が認可される。

（5）の受動文に関する規則と（7）の *wh* 移動に関する規則はそれぞれ異なる言語現象を規則化・一般化したものであり、一見すると何の関連性もないように思われる。しかし、（5）と（7）を比較しながら観てみると、ことばが持ついくつかの重要な特性が見て取れる。

（8）（5）と（7）に共通していることばの特性
a．「移動」という操作を持つ。
b．「移動」には動機が必要である。
c．「移動する前の構造」と「移動した後の構造」がある。

（5）で言えば、格を付与されるために（＝（8b））当初目的語として生成された名詞句が主語位置へと（＝（8c））移動する（＝（8a））。また、（7）で言えば、[Q]という素性が認可されるために（＝（8b））当初目的語として生成された *wh* 句がC指定部へと（＝（8c））移動する（＝（8a））。さらに英語の他の言語現象、もっと言えば英語以外の様々な言語において様々な言語現象を分析すると、（8）に挙げた諸特性が常に機能していることが明らかであるため、（8）に挙げた諸特性はことばが本質的に持つ特性、つまりUGの特性として捉えることができる、と考えるのである。

３．言語学と歴史学の共通点

３．１．「目に見えないものがある」という仮定

前章で述べたように、生成文法理論の目標はヒトの脳内に生得的に備わっている普遍文法（UG）の解明である。しかし、ここで素朴な疑問を持つかもしれない。果たしてUGなどという言語機能が本当にヒトに備わっているのだろうか。脳内にある、というのであれば、脳を解剖することによってこれがUGだと指し示せるような器官が物理的にあるのだろうか。答えは否である[4]。また、母語の獲得の過程において我々はUGの存在を意識しUGに頼ってきただろうか。これもまた答えは否である。事実、本稿を読んで初めてUGの存在を知らされた人がほとんどであろうから、それまで知りもしないものの存在を前提として母語を獲得してきたと言える人などいるはずもない。これらの問いは生成文法理論の誕生以来常に哲学や生物学と論争になってきた点である[5]。その論点は「目に見えないものがある」という仮定に対する拒否反応とも言える。例えば万有引力の法則について考えてみたい。ニュートンがリンゴが木から落ちるのを見て万有引力を発見した、というのは有名な逸話だが[6]、発表当時大陸派自然哲学者（ライプニッツなど）たちからは「目に見えないものを前提にしているオカルト的な思想」と非難され受け入れられなかった。それと同様に、目に見えないUGが脳内に生物学的な器官として存在するというチョムスキーの主張に対しても相当な批判が向けられており、その存在が不確かであるにもかかわらずUGを一方的に仮定し、自ら立てた難問を前にもがき苦しんでいる姿は滑稽である、と揶揄されることさえある。この反論に対してチョムスキーは様々な形で再反論しているが、本稿ではチョムスキーの主張を踏まえたうえでもう少し分かりやすくこの反論について考えていくことにする。具体的には、「目に見えないものがある」という仮定を歴史学をはじめ様々な学問における共通点として捉えていくことで、その妥当性を考察したい。

３．２．研究の出発点としての「目に見えないもの」

まず、天文学を例にとろう。夜空に輝く光の点は、地球からはるか遠く離れた恒星が発する光が地球にまで届いたものである。例えばオリオン座α星のベテルギウスは地球から約642光年離れていると推定されているが、そこに本当にベテルギウスが存在するかどうかを自分の目で直に確かめに行った人は誰もいない。つまり我々が実際に目にしているのは光の点のみであって、本当にベテルギウスなる星が存在するかどうかは不確かである。しかし「そこにベテルギウスが存在する」と仮定すると、なぜオリオン座の左上に光の点があるのかを説明できる。そしてベテルギウスが実在することを様々な測定方法を用いて実証することで、その仮定は一般的事実となるのである。

先に挙げた万有引力の法則も同様である。目に見えない万有引力がある、と仮定することで、

4　言語活動時における脳の働きの分析、脳に外傷を負うことで生じる失語症の研究、さらには遺伝的要因で生じる言語障害（特異性言語障害）の研究など、近年言語学と脳科学との共同研究によって脳内における言語活動の様子が少しずつではあるが明らかになってきており、脳内にUGが存在するとする生成文法理論の仮説が脳科学の点からも裏付けられようとしている。詳しくは萩原（1998）を参照のこと。

5　生成文法理論が持つ哲学的意義や哲学者（パットナムやクワインなど）との哲学的論争の詳細については阿部（近刊）を参照のこと。

6　この逸話にあるような事実があったかどうかについては信憑性が低いようである。ニュートンにとってより重要だったのは、リンゴは木から落ちるのに、月が地球に落ちてこないのはなぜか、であり、その問題意識からニュートン力学を考案し天体の運動を解明するに至った。

なぜリンゴが木から落ちるのかを説明できる。確かにニュートン力学にはその説明力に限界があり今やアインシュタイン力学にとって代わられているとはいえ、ニュートンの考察が物理学を大きく転換させ前進させたことには疑いの余地はなく、万有引力という発想はある程度において一般的事実として認められるものであろう。

では歴史学ではどうだろう。歴史学の最大の醍醐味は、過去に思いを馳せ、過去の人物や出来事を想像し、その内実を解き明かすことで過去からつながる現在に生きる自分へのよりよく生きるためのフィードバックを得る、という壮大なロマンを味わうことであると考えるが、歴史学の最大のミステリーは、直接歴史時代にさかのぼって事実を観察することができないため、どのような結論に至ったとしても実際にどうであったかは推測の域を出ないという点である。ここで邪馬台国を例に取りたい。邪馬台国は２～３世紀に日本列島に存在したとされる国のひとつであるが、邪馬台国がどこにあったのかという議論はいまだにその解決を見ていない。Wikipedia で検索してみると、「畿内説」「九州説」「東遷説」「四国説」の４通りの主張の存在が示されている。また「畿内説」でも琵琶湖周辺や大阪、奈良など、「九州説」でも九州北部や宇佐神宮、宮崎県など、同じ説であっても具体的にどこに邪馬台国があったのかに関する主張が細分化されていることが分かる。どこに邪馬台国があったのかを最も手っ取り早く確認する方法はタイムマシンに乗って当時にさかのぼりその事実を確認することであろうが、当然ながらタイムマシンなどというものは存在しないのだから、我々には邪馬台国がどこにあったのかを直接自分自身の目で確認する方法はない。しかしそれぞれの主張において研究者たちは様々な資料を読み解き、各々の主張を展開している。つまり、邪馬台国がどこそこにあったという仮説を様々な資料と照らし合わせて論証することでその妥当性を主張しているのである。もちろん歴史的事実はひとつであるから上記４つの主張のうち３つは誤りということになるだろう（あるいはその全てが事実ではない、ということさえあり得るかもしれない）が、論拠に据えるに足るだけの証拠がある限りそれらの主張はアクティブであり、妥当な主張であると考えて差し支えない。

以上の論点を踏まえると、生成文法理論において UG の存在を仮定することの妥当性はおのずと明らかになるのではないだろうか。ヒトの脳内に生物学的器官として UG が生得的に備わっていると仮定することで世界中の様々な言語現象を説明できるとすれば、UG の存在は少なくとも抽象的なレベルにおいて妥当であると言える。UG の存在を否定するのであれば、UG なしで生成文法理論が扱っている言語現象を説明できるシステムを構築する必要があるが、現在までにそのような代案は提示されていない。UG を超える説明力を持った主張がなされない限りにおいて、UG は、そして UG を仮定した生成文法理論は、ことばの仕組みを正しく捉えられる妥当な論理的構築物として存在しうるのである。

このように、様々な学問において「目に見えないものがある」という仮定は研究の出発点であり、扱う内容・分野が異なるだけでその研究方法や主張の立て方において大いに共通点を持つことが分かる。具体的には、①取り組むべき問題を特定し（問題の特定の前には現状を正確に観察する必要がある）、②その問題に関するデータをまとめ、③それらを説明するのに必要な仮説を設定し、④その仮説がいかに妥当であるかをさらなる証拠データを提示しながら論証する、という研究の進め方は、学問分野の如何を問わず共通する手順であろう。本稿第２章はまさに生成文法理論に基づいた言語研究という具体的事例としてこの手順を示したものである。そしてこの手順こそ私の恩師が常々言っていた言語研究の思考プロセスであり、このプロセスをきちんと理解し身につけることで言語研究のみならずあらゆる場面において論理的な思考ができるようになる、ということを恩師は伝えたかったのだと思う。次節ではこの「目に見えないものがある」とう仮定が学生たちが社会に出てからどのように役立てられるかを考察する。

４．社会における「目に見えないもの」

前節で見たように、様々な学問において「目に見えないものがある」という仮定は研究の出発点である。そしてこの仮定を出発点とした一連の思考プロセスは、学生時代における研究活動のみならず、社会に出てからの生産活動においても重要な役割を果たすはずである。本節では社会における上記の一連の思考プロセスについて考察し、学問レベルにおける思考プロセスとの並行性を指摘することで、学問分野の如何を問わず学生が大学時代の研究活動で何を学び身につけるべきかを明らかにしたい。

これまで見てきた研究活動における一連の思考プロセスが社会生活においてもっともよく活用されていると思われる場面のひとつとして、会社内における様々な企画の立案が挙げられよう。

我々の多くは今の暮らしを余程のことがない限り「こういうものだ」と受け入れ、ある程度の満足感を得ている。それはそれで大変結構なことではある。しかし、少なくとも現状を何の疑問も持たず受け入れそれに満足している状態からは新しい何かを生み出すモチベーションは生まれてこない。よりよい暮らしのため、よりよく生きるため、ほんの少しでも疑問に思ったり不便に思ったりすることがあれば、それを改善できるよう策を講じる必要がある。つまり、社会における生産活動は、より良い暮らしのため「今」にメスを入れ様々な変革を講じていくことだと言えよう。

また、日常生活において一見何も問題がないように思えるのは、先にも述べたように、現状を「こういうものだ」と受け入れてしまっているからではないだろうか。そうすることが当たり前、そうすることが常識、みんなそうしている…。

しかし「当たり前」や「常識」だと思われていることをこれまでの「常識」にとらわれない斬新なモノの見方で眺めたときにこそ新しい何かが生まれるものである。この点に関してティナ・シーリグ著 *What I wish I knew when I was 20* の中で取り上げられているサーカス集団「シルク・ド・ソレイユ」の例が非常に示唆的で興味深い。シルク・ド・ソレイユの創設者 Guy　Laliberté はサーカス興業が低迷していた1980年代にどうしたら今までにない新しいサーカスを作り出せるかを考えていた。その過程において、Laliberté はまずそれまでのサーカスに対する一般的なイメージ（サーカスとはこういうものだ、というサーカスに関する「常識」）を列挙した。大きなテント小屋、猛獣、安いチケット、土産売りの大声、同時にいくつものショーが行われる、陽気な音楽、ピエロ、等々。次に彼はその一般的なイメージを全てひっくり返してみた。小さなテント小屋、猛獣がいない、高価なチケット、土産売りもいない、一度に行われるショーはひとつだけ、洗練された音楽、ピエロもいない、等々。つまりそれまでのサーカスのイメージを正反対の方向から見つめ直してみたのである。そしてその正反対のイメージをことごとく実現したのがシルク・ド・ソレイユであり、その世界的な成功は我々のよく知るところであろう。

この正反対からモノを見るという思考プロセスの中で生まれた今までとは全く異なる新しいサーカス像（＝シルク・ド・ソレイユ）は発想の段階ではまだ存在しないものであり、これまでの指摘と照らし合わせれば「目に見えないもの」に他ならない。「目に見えないもの」を仮定し、その仮定が正しいことを綿密な計画の上で実証することで、シルク・ド・ソレイユはサーカスに対する固定観念を打ち破った全く新しいエンターテイメントとなったのである。

シルク・ド・ソレイユの例では固定観念を正反対の方向に推し進めることで新しいサーカスのあり様を示したわけだが、「今までにない新しいモノの見方」という意味では必ずしも正反対から物事を捉えることのみが「正しい」捉え方とは限らない。この点で非常に有効であると思われ

るのは「オズボーンのチェックリスト」と呼ばれるものである（別表参照）。このリストはこれまでにない新しい発想をしようとする際の考え方のヒントを与えてくれる。このリストに従えば、シルク・ド・ソレイユの例は「8. 逆にしてみたらどうか？」という発想から生まれたものであることが分かる。さらに言えば、リストにある他の８つのヒントを基に発想された新しいサーカス像はシルク・ド・ソレイユが示したものとは異なるものになるかもしれない。そしてそれらのサーカス像は発想の段階においては「正解」なのである。あとはそれぞれ推し進めようとする案に対して具体的な方策を練ることで「勝算」を見出し、「勝算」が見込めると誰もが認めた具体案を実行に移す、という一連の過程を経ることで、シルク・ド・ソレイユとは異なる新しいサーカスを提示できるかもしれない。つまり、シルク・ド・ソレイユはサーカスに対する「新しいモノの見方」の一例にしかすぎず、サーカスの可能性は無限に広がっているのである。

「常識にとらわれる」という点では、今までにない新しい発想に対する一種の拒絶反応もそのひとつだろう。斬新なアイデアとはときに型破りで「常識」を根底から覆すようなものであるため、そんなアイデアは「非常識」だとか「実現できっこない」などとして門前払いを食らうことがよくある。先掲したシーリグの著書にはバルーン血管形成術を考案した医師たちの苦難の道のりが記されている。それまで心筋梗塞などの心臓手術は開胸手術が一般的であり、開胸手術以外にそれらの病気を治療する方法はない、つまり開胸手術こそが「最善の方法」であると考えられていた。そんな中開胸せずに治療できるバルーン形成術を考案・発表した医師たちには「常識外れ」などの相当な批判が寄せられ、勤務していた病院を退職に追いやられた医師もいたとのことである。しかしその後の研究成果や臨床結果などからバルーン形成術の有効性が認められ、今やバルーン形成術が開胸手術にとって代わる「最善の方法」となった。Seelig はこの例を引き合いに出し、次のように述べている。

（９）“…This is a great example of a case where the status quo is so entrenched that those closest to the situation can't imagine anything different.”

Tina Seelig, *What I wish I knew when I was 20*, P22.

我々は日々「常識」に縛られながら生きている。さらにどのような業種に勤めようとその業種独特のしがらみや「常識」に縛られてしまうものである。「新しいモノの見方」とは「常識にとらわれない発想」であり、「常識」の殻を破るには上記の医師たちに向けられたのと同じ程度の批判にさらされる覚悟で臨まなければならない。しかしバルーン形成術が開胸手術をも超える「最善の方法」の地位を確立できたのには、医師たちが自ら提案した仮定（＝バルーン形成術）の妥当性をとことん信じ、その妥当性を証明するためにまさに骨身を削って尽力したからに他ならない。批判にさらされるという点では、生成文法理論が哲学や生物学から向けられた批判やニュートンが大陸派自然哲学者たちから向けられた批判に対してそれぞれが格闘してきた歴史と重なるものがある。チョムスキーもニュートンも「常識」にとらわれないこれまでにない新しい発想を提起し、それまでの「常識」の世界からの批判にも屈せず自らの提案の妥当性を追求した結果時代を変えるような新しい理論を構築できた姿は、まさに上記の医師たちが辿ってきた道筋と同じである。このように、研究活動においても社会に出てからの生産活動においても「常識」を打ち破るような新しい何かを成し遂げるためには、「常識」の範囲内から向けられる強い風当たりにも動じないゆるぎない信念と、苦難に直面してもへこたれないある種の「根性」が必要であると言ってよい。

５．結語　―「真理はわれらを自由にする」とはどういうことか―

別府大学の建学の精神「真理はわれらを自由にする」についての言わば「統一見解」は別府大学ホームページ（URL: http://www.beppu-u.ac.jp/general/spirit/）に掲載されている別府大学創設者佐藤義詮先生のことばに集約されようが、本稿を踏まえ、甚だ勝手で一方的にではあるが、私なりにこの建学の精神を解釈したい。

学問の世界であれ実社会の世界であれ、我々は真理を追究して活動している。生成文法理論で言えば、ことばの本質を明らかにし、ことばを用いているヒトの本質を明らかにすること。また社会においては、よりよい暮らしのため、よりよく生きるため、「今」を少しでも変革させること。しかしながら、研究・開発の結果一応の結論に達したように思われる場合においても、それが必ずしももうこれ以上手を加えられない「最終的な完成品」というわけではない。生成文法理論においても、標準理論→拡大標準理論→原理・パラメタ―理論→ミニマリストプログラム→ラベル付けアルゴリズムと時代を経るごとにその理論は大きく修正され、今後もさらなる変化が起きることは必至である。また、移動通信機器を例にとると、ポケットベル→PHS→携帯電話（俗に言うガラケー）→スマートフォン→タブレットとIT技術の発展とともに次々と進化しているし、我々の想像をはるかに超えた新製品が今後開発されることは大いにあり得るだろう。生成文法理論の進化も移動通信機器の進化も「よりよい姿」を追求する歴史であり、ここでいう「よりよい姿」を「真理」と置き換えても差し支えないのではないだろうか。我々が真理を追究して活動しているとは、まさにこのことである。だが、上述の通り、どんなに追求しても、「最終的な完成品」としてのゴールである「真理」にはそう易々とたどり着けはしない。かといって、結論に到達できないのだから我々の活動は無駄かと言われればそんなことはない。真理に向けて一歩でも前進させようと努力することは、「今」を少しでも良くすることであるし、今はできなくても将来における大躍進の礎となるかもしれないからである。そして、真理を追究する方法論としては、本稿で扱った手法が取られることが多いのではないだろうか。今ある私たちの姿を精緻に観察し、「当たり前」や「常識」と思われていることに対して「なぜ？」と問いかけ、「常識」を打ち破るような仮定を提示し、その仮定の妥当性を追求していく。仮定を提示するということは「目に見えないもの」があると想定することであり、「常識」を打ち破るということは今までにはない新しいモノの見方で今を見つめることがあるが、何を仮定するかやモノの見方は人によって様々であってよい。その点で我々は自由である。以上を踏まえ、私なりに本学の建学の精神を解釈すると以下の通りである。

（10）「真理はわれらを自由にする」
　　＝「よりよい姿の追究は我々に自由な発想を可能にする」
　　＝「我々はよりよい姿を追究する限りにおいて自由である」

（10）に掲げた「よりよい姿」＝「真理」を追求する具体的な対象として、私はことばに焦点を当て研究しているし、史学・文化財学科の学生は歴史に焦点を当てている。興味の対象や具体的な方法論こそ違うものの、我々が目指すべき目標は真理の追究であることに変わりはなく、学生時代に真理を追究するプロセスをしっかり身につけることで、社会に出てからも「自由」でいられるはずである。本学で学ぶ４年間のうちに真理を追究するための、そして「自由」な存在でいられるためのスキルを是非とも身につけてほしいし、我々教員には学生が真理を追求するための

スキルを身につけられるような指導を行う責務がある、と自戒の念を込めて断言する。

オズボーンのチェックリスト

1	他に使い道はないか？ 転用（Put to other uses）	そのままで新しい使い道は？ 例 わけありグルメ 改善、改良して使い道は？ 例 電球を殺菌装置に
2	他からアイデアが借りられないか？ 応用（Adapt）	他にこれに似たものはないか？ 何か他のアイデアを示唆していないか？ 真似できないか？ 例 「こうもり」からレーダー
3	変えてみたらどうか？ 変更（Modify）	意味、色、動き、音、匂い、様式、型などを変えられないか？ 例 太宰治『人間失格』が表紙替えでブレイク
4	大きくしてみたらどうか？ 拡大（Magnify）	より大きく、強く、高く、長く、厚く 例 ラージサイズ専門店 時間は、頻度は、付加価値は、材料は？ 例 コンビニの高頻度配送
5	小さくしてみたらどうか？ 縮小（Minify）	より小さく、軽く、低く、短く 例 世界最薄デジカメ 何か減らせないか？ 例 シャンプーなし理髪店 省略できないか？ 例 一人用カレー具材
6	ほかのものでは代用できないか？ 代用（Substitute）	何か代用できないか？ 例 輸血用人工血液 他の素材は？ 例 豆乳ケーキ 他のアプローチは？
7	入れ替えてみたらどうか？ 置換（Rearrange）	要素を取り替えたら？ 例 別の言葉に置換してみる 他のレイアウトは？ 例 社内デスクの配置変更 他の順序は？ 例 発表の順番を変えてみる
8	逆にしてみたらどうか？ 逆転（Reverse）	後ろ向きにしたら？ 例 リバーシブルバッグ 上下、左右をひっくり返したら？ 順序を反対にしたら？ 例 価格を1/10に決定して開発開始
9	組み合わせてみたらどうか？ 結合（Combine）	合体したら？ 例 消しゴム付きシャープペンシル 混ぜてみたら？ ユニット、目的を組み合わせたら？ 例 携帯のバーコードリーダー

別表：オズボーンのチェックリスト
（IT メディアエンターテイメント「アイデアにつまったら、「オズボーンのチェックリスト」を試してみる」（http://www.itmedia.co.jp/bizid/articles/1405/21/news022. html）より引用）

参考文献

阿部潤．近刊．*生成文法理論の哲学的意義：内在的・自然主義的アプローチ*、開拓社.

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding,* Dordrecht: Foris.

Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of Language,* New York: Preager.

Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program,* MIT Press, Cambridge, Mass.

Chomsky, Noam（2000）"Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press, Cambridge, Mass.

Chomsky, Noam（2001）"Derivation by Phase," *Ken Hale: A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, Mass.

Chomsky, Noam（2008）"On Phases," *Foundational issues in linguistic theory: essays of Jeanronger Vergnaud,* ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, Mass.

Chomsky, Noam. 2013. "Problems of Projection," Lingua130：33–49.

Chomsky, Noam. 2015. "Problems of Projection: Extensions," *Structures, strategies and beyond: Studies in honor of Adriana Beletti,* ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3–16, Amsterdam: John Benjamins.

萩原裕子. 1998. *脳にいどむ言語学*，岩波科学ライブラリー59, 岩波書店.

中島平三、池内正幸. 2005. *明日に架ける生成文法*，開拓社.

Seelig, Tina. 2009. *What I wish I knew when I was 20*, HarperOne, HarperCollins Publishers.

上山あゆみ. 1991. *はじめての人の言語学―ことばの世界へ*，くろしお出版.